

新しい時代の芽生え

[聖書] 出エジプト記 1章 22節～2章 10節

ファラオは全国民に命じた。「生まれた男の子は、一人残らずナイル川にほうり込め。女の子は皆、生かしておけ。」レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見ていると、そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を歩き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。開けてみると赤ん坊があり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引取って乳を飲ませ、その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた（マーシャー）のですから。」

[序] 新年にあたり

明けましておめでとうございます。今日は2009年最初の日曜日です。皆さんようこそ、今年第一回の礼拝にご出席下さいました。皆さんが一年を通じて、日曜ごとの礼拝から霊の祝福を豊かにいただいて、良き一年をお過ごしになりますように、お祈りしてやみません。

埼玉は穏やかな日和に恵まれた三箇日でした。皆さんは、如何お過ごしでしたか。私は元日の午後浦和教会の年始礼拝に出席し、母教会の皆さんに日頃のお祈りを感謝して来ました。その時、ぎっくり腰で動けなくなり、29日に入院した喜美子のために、31日の浦和教会祈祷会で皆さんが祈ってくださったと、出席者26人署名の回復祈願のお手紙を頂戴しました。

実は26日午後、会堂のエアコンを点検しようと、大きな梯子を45度位のゆるい勾配にして、喜美子に下を押してもらって上りましたところ、ワックスをかけた床なので、梯子がずるっと滑り、横柱から外れかかりました。喜美子が渾身の力で抑えてくれたので、私は梯子もろともに転落するのを免れましたが、喜美子はその拍子に、腰椎が圧迫骨折してしまったのです。すぐ与野の私の行きつけの治療院へ行き、26、27日とハリ・マッサージの治療を受けましたが、痛みがひどくて動けません。K夫妻の強い勧めもあり、お医者さんを紹介されて、29日に整形外科に安静入院となった次第です。

7日からインドのコルコタで開かれるアジア・バプテスト女性大会に参加する予定でしたので、女性連合に旅行キャンセルの通知をしたことで、浦和教会のM会長の知るところとなり、教会の祈祷会でお祈りいただくことになったのです。ところが或る方々には、私が梯子から落ちて、それを下で受けとめた喜美子がつぶれてしまったと伝わったようです。

いずれにせよ、私の軽率な行動で喜美子に大変な難儀をかけ、また多くの皆さんにご心配をかけ、申し訳ありませんでした。自分たちの老齢をよくよく自覚して、以後慎重に行動するよう肝に銘じました。

さて聖書教育の1月からの教案は、今年の7月から9月にかけて学んだ創世記に続く、旧約聖書第二番目の書・出エジプト記を学びます。今朝はその第一回で、出エジプトの立役者 モーセの誕生にまつわる記事です。私は新年に当たり、次のみ言葉をいただきました。「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている」(イザヤ書43:19)。そこで、このみ言葉によりながら、今日の聖書の箇所を学ぶことにいたしました。

[1] 王女に拾われたモーセ

アブラハム、イサク、ヤコブと続いた創世記の族長物語は、兄たちに妬まれて奴隷として売り飛ばされたヨセフが、エジプトの総理大臣に出世し、そのヨセフをたよって、ヤコブと息子たちがエジプトへ移住したこと、ヤコブがエジプトで平安に死んだところで終わりました。

さて出エジプト記には、エジプトに移住していたイスラエルの民が、エジプトを脱出して、以前に暮していたカナン之地に戻ってくる歴史が記されています。時代はエジプトに移住した紀元前 1700 年頃から、約 400 年経っていました。エジプトの王朝は変り、ヨセフの功績など知らない王になっていました。イスラエルが移住を許されたゴシェン地方はナイル川河口の東で牧草豊かな地です。東の国境に近く、エジプトの国にとっては、パレスチナ地方に対する防衛前線に当たりました。

そのような重要な地域に、パレスチナから移住してきたイスラエル民族が約 60 万人にも増えて暮しているのです。いざ戦争となったら、パレスチナ側に通じてエジプトに刃向かうかもしれません。危険だと国王が考えたのも当然でしょう。イスラエル人を抑圧していく政策を進めました。そしてとうとう「生まれた男の子を一人残らずナイル川に放り込め」という大変な命令が出るところまで、事態が悪くなったのでした。

皆さん、「ヘブライの男の子が生まれると、ナイル川に放り込んで一人残らず殺してしまえ」とは何というひどい命令でしょうか。親にとって、また民族として絶望的な状況です。その中で、モーセが誕生したのでした。母親は 3 ヶ月隠して育てました。でも隠しきれなくなりました。パピルスの籠を用意し、入念に防水加工をして、赤ん坊を入れて、河畔の葦の茂みの間にそっと置きました。

そこは王女が水浴びする場所でした。王女は籠を見つけました。開けてみると男の赤ん坊が泣いています。ヘブライ人の男の子だと分かりました。王女は国王の命令を知っていたはずですが、でも泣いている子がふびんでどうしても籠に戻して、川に流すことが出来ませんでした。その様子うかがっていた赤ん坊の姉が出て来て、「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」と申し出ます。

この一言で王女の心は決まりました。「そうしておくれ」。姉はすぐさま母を連れて来ます。「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」。こうして赤ん坊は、乳離れするまで母の手許で育ち、王女に渡されました。王女は、水の中から引き上げた(マーシャ)ので、彼をモーセと名付けました。こうしてモーセは「エジプト人のあらゆる教育を受け、素晴らしい話や行いをする者になっていったのでした。」(使徒6:22)

[2] 思いを超えた救いの導き

後にモーセは神さまのご命令で、イスラエルの民を率いてエジプトを脱出し、カナン之地に戻っていく歴史的な大事業を成し遂げます。エジプトにとり多数の奴隷を失うことは、国家的大損失ですから、王との交

渉は11回に及ぶ厳しいものでした。王の前で一步も引かない堂々としたモーセの態度の背後には、王宮で育った経験の裏打ちがあったからです。

鳥合の衆を率いて荒野の中でさまよいながら、神さまから示された律法に基く教育訓練を施して、一つの民族にまとめ上げていくことは至難の業でした。そこでも、モーセが受けた王宮での最高の帝王学が、役立ったに違いありません。こう考えてきますと、モーセがエジプトの王女に拾われ、その子として育つことは、出エジプトという神の民の歴史的大事業にとって、欠くことの出来ない筋道だったと言えます。

でもモーセの母にしても、王女にしても、ましてや機転をきかせて母親を王女に引き合わせた姉にしても、出エジプトという神さまの大きな救いのみ業と、そのために用いられるモーセの将来を知った上で、協力し合ったわけではありませんでした。母親はひたすらわが子を一日でも長く手許で育てようとしただけです。川の水が浸み込まないように、涙を流しながらパピルスの籠に入念に防水加工して、少しでも生き伸ばそうとしただけです。ナイル河畔の茂みの間に置いたその場所が、王女の水浴びの場所だったとは、不思議ですね。

王女は籠の中の赤ん坊がヘブライ人の男の子だと分かった時、どんな思いになったことでしょうか。国王の命令を知っています。面倒なことに巻き込まれないように、捨てようとする人の方が多いのではないのでしょうか。彼女はためらいました。泣く子がふびんで堪らなかったのです。その時、この子の姉が勇気をふるって進み出て、「乳母を呼んで参りましょうか」と申し出ました。母の嘆きを見てきた姉の必死の言葉が、王女の背中を押しました。

命を生み、守り、育てる役割を担う女性たちが授かっている命を大事にする思いが、このようにして不思議につながれて、強大な権力を持つ国王がもたらした暗闇の中で、大切な命を育て上げていくことに用いられていったのでした。あのままエジプト王の弱体化政策が続けば、イスラエル人たちは奴隷として痛めつけられて劣悪な民に落ち込み、エジプトで朽ち果てて行ったことでしょう。ですから神さまは、神の民を見捨てず、このように女性たちを用いて、救いの手を差し伸べてくださったのでした。

私はシンガポールで10年暮しているうちに、外国生活を送る場合には、その社会に融合していくよう思慮深く暮さねばならないと、気付かされました。その国の人たちに違和感を与えたり、危険視されるようになると、その地に居られなくなるからです。その点でエジプトに移住したイスラエルの人たちは、無神経過ぎたのではないのでしょうか。

自分たちの方から、人口抑制の工夫をしたり、自分たちはエジプトに感謝し、その繁栄に喜んで貢献しようとしているのだということを、事あるごとに表明して、安心して受け入れてもらう努力を惜しまないでいるべきでした。そうしたらこんな酷い扱いを受けることにはならなかったでしょう。良いリーダーが居なかった悲劇と言うべきです。

しかしエジプトに安住しては、神の民イスラエルは何時までも確立しません。矢張り、アブラハムが神さまから約束された土地カナンに早く戻るべきです。そのためには酷い扱いを受けて、エジプトに居られなくなる経験が必要でした。彼らの思慮に欠けた無神経さも必要だったのです。また「ナイル川に男の子を捨てろ」という酷い命令が、モーセをエジプトの王宮で教育を受けさせるきっかけになったのでした。

こう考えていきますと、私たち人間の犯す愚かさや罪も、神さまはお用いになって、救いのみ業を進めてくださるのだと言うことが、分かってきます。「万事が益となるように共に働く」(ローマ8:28)とは、本当にそうだなとつくづく思われます。

[結] 今やそれは芽生えている

今日のこのメッセージを準備しているうちに、み言葉が示されました。「見よ、新しいことを わたしは行なう。今やそれは芽生えている」(イザヤ43:19)。モーセが誕生した時、イスラエルの民は絶望的な状況でした。男の子を産んでしまった母親たちの悲嘆はいかばかりだったことでしょう。でも神さまは、モーセの母、姉、そして王女を不思議につないで、小さな命を守らせ、育てさせて、将来の出エジプトという救いのみ業を着々と進めて下さったのでした。か弱い女性たちの間で、出エジプトという大事業の小さな芽生えが、始まったのでした。

川越教会も再建の歩みを始めました。働き盛りの牧師を迎え、その生活を支えて、皆で積極的に伝道を進め、会堂に人が溢れ、増改築が必要になるほどの教会にならなければなりません。世界に福音の使者を送り出して、教会の使命を果たしていかなければなりません。ヴィジョンを掲げることです。幻のない民は滅びます。祈りましょう。

モーセの母は、わが子を三ヶ月必死に育て、丹念に籠をこしらえて、川に流しました。その子を拾い上げた王女も、泣く子を憐れに思い、引き取って育てました。私たち一人ひとり小さく弱くても、自分で出来ることを懸命にしていって行く中で、小さな命が一人の手からもう一人の手へと託されていく時に、神さまの新しい救いのみ業が、芽生え育っていくのです。「今や それは芽生えている」。何と嬉しい言葉でしょうか。

川越教会を通して、神さまは新しいことを行うとお約束くださっています。手と手がつながって小さな命が大事にされていく時に、私たち小さな群れの中にも、その新しいことが芽生えていくのです。希望をもって、一人ひとりが、ベストを尽くす一年にいたしましょう。

完